

認知症と介護

親仁会佐藤病院 神経内科 田村洋平



前回のコラムで、認知症は「子どもが発達していくのと同じように、発達を逆行するような退行のプロセスをみている」とも考えられるとお話しました（見逃した方は佐藤病院HPをご覧ください）。

とくに認知症のあるご高齢の方に対して、つい幼児言葉をなげかける光景をよく見かけます。「おばあちゃん、ご飯こぼしちゃったんだ」「おじいちゃん、おトイレすませてきちゃってね」。介護の現場などではよく耳にするやりとりです。意識していなくても、知らないうちに子どもと同じ面影をご高齢の方を感じているのかもしれないですね。よく解釈すれば愛らしい存在として認識しているのでしょうか。

ただし発達している途中の子ども

と、退行の過程にある認知症の方には大きな違いがあります。それは、その方が経てきた経験・歴史でしょう。ご高齢の方々はいわば人生の大先輩です。私たち介護者の世代を育てながら、日本の高度成長を支えてきた方ばかりです。ですので、ご高齢の患者さんには尊敬・感謝の気持ちを常に抱きながら医療・介護にあたりたいと私自身は思っています。

とはいえ、時によって介護の現場は壮絶です。闘いといっても過言ではないことも多くあります。家族を含めた介護者が常に尊敬の念をもって介護にあたるような認知症のコントロールをめざして、日々の診療をつづけていきたいと考えています。